

「随分とウチのもんが
世話になったみたいじゃねーか
よっ!!」

「いいか?この辺仕切ってるのは
アタシらだからな?
ザコが粹がつてんじゃねーぞ?」

「涼華さん!!」

まつば りょうか
松羽 涼華

「二度と逆らえねえ
身体にしてやるつか?あ?」

涼華さんはうちを仕切ってるトップだ
喧嘩も強えし何より
俺らみてーなもんを誰も見捨てはしない

滅茶苦茶最強で最高のリィダだ
俺らは全員涼華さんのためなら命張れる
俺らにとつて憧れの存在
それが涼華さんだ

そんな涼華さんと
連絡が取れなくなって3日が経った！

俺らが必死になって探しても
手掛かりは掴めなかったが

ある日俺らの元に
1本の動画が送られてきた
そこに映っていたのは！

涼華…さん？

「グハハハWW何だコイツW
雑魚じゃねえかW」

「ぐっもうわかった…
はっ離せ…」

「随分とウチのもんが
世話になったみてえじゃねえか？」

「おいっ!!人にモノを頼むときは
『お願いします』『じゃねーのか?』
出来ねーんならこのままシメて
あの世行きだなWWWW」

「おっ…おねがいしますうう…
離して…くだ…くだしやい…
助けて…助けてくだっ下さい!!!」

「グッハハWW
こいつ泣きながら命乞いしてるぞW」

「ザコが粹がつてんじゃねーぞ?
でめえ二人じゃ勝てねえ癖によ
俺らに二度と逆らうな
わかったか?あ?」

「わかりつわかりました!
「めんなさい!」めんなさい!」

そこには泣きわめきながら命乞いをする
涼華さんの姿が映し出されていた!

「おいW服脱がせろW」

俺らは目を疑った

「おい見ろよW
こいつ胸でっけえぞW」

「こんなんぶら下げて
男に勝てると思ってたのか? W」

「はっW所詮雌が
調子乗ってただけだったなW」

「くっ…勝手な
事を…っ!!」

「…?」

「でかこいつWビビって
漏らしてんじゃねーかW」

「ガン飛ばしてんじゃねえぞ?
舐めてんのか? あ?」

「クソ生意気だなこの女
まだ自分の立場
分かってねえみてーだなW」

「メスにはメスらしく
反省してもらうかW」

「全部脱げ女っ!!
二度と逆らえねえ身体にしてやるよW」

「もっと気合入れて
振れやWW声も小せえぞW」

「こっ降参…
降参でくす!!」

「は?何だコイツ
抵抗してきやがるW」

「おいこの手どけろやW
チ●コはいんねえだろW」

「グハハハWみっともねえWW」

「おい誰が隠して
良いつつったよWW」

「よしWんじゃそろそろ
ぶち込むかWWW」

「ちょ!!それだけは…
それは…ダメ!!」

「おっお願いします!!
それだけは…!!」

「わっ私松羽涼華は…
もう二度と皆様に
逆らわないことを…
ちっ誓いますっ」

おっおっ



「わっ！分りましたあ!!
生かして頂いて
ありがとうございます!!」

「へへwww
自分の立場が
分かってきたかw」

「よし」発目行くぞ!!」



おっおっ

「俺らに逆らわないって
誓ったよな?w
今日からお前は俺らの
肉奴隷なw」

「そっ…そんな!!」

「生かしてもらえただけ
ありがたいと思えよw」

「分かったか?!便器!!」



「一発って…?!」

「中出しに
決まってんだろw」

「てめえは俺らの
肉奴隷だからなw
何されてもありがたがれ！
分かったのか?」

「くっ…っはい…
中出しして頂いて
ありがとうございます…」

「グハハハwじゃあ次は
裸踊りやつてもらうかww」

三下共の言いなりになり
凌辱されて行く涼華さんを
俺らは見ていることしか
できなかった…

「おらwもっと
気合入れて踊れよww」





おちんぽをこころ♡

おっ、おちんぽ♡
おちんぽ♡

「グハハWW
傑作だわWWW」

「ここにいる全員満足させろよ？W
肉奴隷の義務だからなW」

「ほらW覚えこませたセリフも言えやW」

性奴隷
道具

「よし望み通り使ってやるW」

ぐわんぐわん♡
あ♡

おっ♡
パン♡

「よしこれ見てる奴らに言ってやれWW」

「でつけえ声でだぞ」

「おっ...お前ら...見てる...か？」

「私は見ての通り...こっこの方々の性欲を処理するためのだけの...穴っぽこ...肉奴隷になったんだ...」

「もう...前みたいに面倒見てやることは出来ないけど...せいせい元気でいてくれ...」

「あっあと...私のことは探さなくていい...」

「私...松羽涼華は...肉奴隷として服従すること...を...しっ幸せに思っているからなっ...」
「だからもう会うこともない...」
「一生...性処理要員として...生きていくから」

それ以来...
俺たちはもう涼華さんと会うことは出来なかった...
今もどこかで涼華さんは...
あいつらの都合のいい女として...
生きているんだろうか

















おちんぽをこ
お女の「こ」

おちんぽ
おちんぽ

肉便器
IN
取

性交
射精

イググググ

おちんぽ



「随分とウチのもんが
世話になったみたいじゃねーか
よっ!!」

まつば りょうか
松羽 涼華

「二度と逆らえねえ
身体にしてやるつか? あ?」

「涼華さん!!」

「いいか? この辺仕切ってるのは
アタシらだからな?
ザコが粋がつてんじゃねーぞ?」

涼華さんはうちを仕切ってるトップだ
喧嘩も強えし何より
俺らみてーなもんを誰も見捨てはしない

滅茶苦茶最強で最高のリィダだ
俺らは全員涼華さんのためなら命張れる
俺らにとつて憧れの存在
それが涼華さんだ

そんな涼華さんと
連絡が取れなくなって3日が経った！

俺らが必死になって探しても
手掛かりは掴めなかったが

ある日俺らの元に
1本の動画が送られてきた
そこに映っていたのは！

涼華…さん？

「グハハハWW何だコイツW
雑魚じゃねえかW」

「ぐっもうわかった…
はっ離せ…」

「随分とウチのもんが
世話になったみてえじゃねえか？」

「おいっ!!人にモノを頼むときは
『お願いします』『じゃねーのか?』
出来ねーんならこのままシメて
あの世行きだなWWW」

「おっ…おねがいしますうう…
離して…くだ…くだしい…
助けて…助けてくだっ下さい!!!」

「グツハハWW
こいつ泣きながら命乞いしてるぞW」

「ザコが粹がつてんじゃねーぞ?
でめえ二人じゃ勝てねえ癖によ
俺らに二度と逆らうな
わかったか?あ?」

「わかりつわかりました!
「ごめんなさい!」ごめんなさい!」

そこには泣きわめきながら命乞いをする
涼華さんの姿が映し出されていた!

「おしW服脱がせろW」

俺らは目を疑った

「おい見ろよW
こいつ胸でっけえぞW」

「こんなんぶら下げて
男に勝てると思ってたのか? W」

「はっWW所詮雌が
調子乗ってただけだったなW」

「くっ…勝手な
事を…っ!!」

「…?」

「でかこいつWビビって
漏らしてんじゃねーかW」

「ガン飛ばしてんじゃねえぞ?
舐めてんのか? あ?」

「クソ生意気だなこの女
まだ自分の立場
分かってねえみてーだなW」

「メスにはメスらしく
反省してもらうかW」

「全部脱げ女っ!!
二度と逆らえねえ身体にしてやるよW」

「もっと気合入れて
振れやWW声も小せえぞW」

「こっ降参…
降参でくす!!」

「は?何だコイツ
抵抗してきやがるW」

「おいこの手どけろやW
チ●コはいんねえだろW」

「グハハハWみっともねえWW」

「おい誰が隠して
良いつつったよWW」

「よしWんじゃそろそろ
ぶち込むかWWW」

「ちょ!!それだけは…
それは…ダメ!!」

「おっお願いします!!
それだけは…!!」

「わっ私松羽涼華は…
もう二度と皆様に
逆らわないことを…
ちっ誓いますっ」

おっおっ



「わっ！分かりましたあ!!
生かして頂いて
ありがとうございます!!」

「へへwww
自分の立場が
分かってきたかw」

「よし」発目行くぞ!!」



「俺らに逆らわないって
誓ったよな?w
今日からお前は俺らの
肉奴隷なw」

「そっ…そんな!!」

「生かしてもらえるだけ
ありがたいと思えよw」

「分かったか?!便器!!」



「一発って…?!」

「中出しに
決まってんだろw」

「てめえは俺らの
肉奴隷だからなw
何されてもありがたがれ！
分かったのか?」

「くっ…っはい…
中出しして頂いて
ありがとうございます…」

「グハハハwじゃあ次は
裸踊りやつてもらうかww」

三下共の言いなりになり
凌辱されて行く涼華さんを
俺らは見ていることしか
できなかった…

「おらwもっと
気合入れて踊れよww」





おちんぽをこ
穴女の「こ」

おちんぽ
おちんぽ

「グハハWW
傑作だわWWW」

「ここにいる全員満足させろよ? W
肉奴隷の義務だからなW」
「ほらW覚えてませたセリフも言えやW」

肉便器
IN
取

性奴隷
道具

「よし望み通り使ってやるW」

イググググ

おちんぽ

「よしこれ見てる奴らに言ってやれww」

「でっけえ声でだぞ」

「おっ...お前ら...見てる...か？」

「私は見での通り...こっこの方々の性欲を処理するためのだけの...穴っぽこ...肉奴隷になったんだ...」

「もう...前みたいに面倒見てやることは出来ないけど...せいせい元気でいてくれ...」

「あっあと...私のことは探さなくていい...」

「私...松羽涼華は...肉奴隷として服従すること...を...しっ幸せに思っているからなっ...」
「だからもう会っ...ともない...」
「一生...性処理要員として...生きていくから」

それ以来...
俺たちはもう涼華さんと会うことは出来なかった...
今もどこかで涼華さんは...
あいつらの都合のいい女として...
生きているんだろうか



